



以算法地方大成斥非問答 完

徳川史料 地方 有十五

9

73
4851



明 保 3
4851

算けん法りやう地ち方た大たい成せい斥せき非ひ問もん答たふ

内田

新田氏
藏記

大正四
内田銀藏

余あま數すう學がくを以もつて後のち進しん修しゆ誘ゆう掖えきを由よし事こと茲こゝに年とし阿あり
講かう習じゆの餘あまり一いつ門もん生せい長ちやう谷や川がわ寛かんが関せみ中ちゆう取との地ち
方かた大たい成せいを由よし出でる一いつ而に一いつ日にち曰いふく此こゝ書しよ算けん術じゆつ乃すなは捷せつ法ぽうを
極きく矣や地ち方かたの秘ひ訣けつ我われ明あきらむよ一いつ見けん瞭りやう然ぜんとら
しむ都と下げお傳つたへる天下てんか乃すなは要やう書しよなりや
即すなはち展てん觀くわん一いつ過か一いつ今いま里り歎たんして曰いふく有あ之し哉や長ちやう谷や
川がわ氏しの利りを喻よるや嚮きやうふ道どう統とう乃すなは傳つたへる或あるは諸しよ家か

乃殘編を上梓を乞ひつゞと是等は有ぬれと
孰纂書しつゞ僻郷乃初學を導く一助もな
きを敢て是れ咎るゝ及地方の説ふまゝに
名彼が長むる所は阿らざり銭利を射るゝ
り杜撰の書を刺せしめ之を愚蒙欺くもの
我 關夫子嘗て子弟を誡免て曰く地方を國
家經濟の大本也其書りお多し必しと上梓を
尚事なうん可と誤あれや治術の大害を致す

事何りや能く長谷川州説の骨き細口の利
は走るゝ是れ刺すたゞ誤なきを誡を辱の
らす況や誤多きおおいてをや門生進んて問
て曰く長谷川塵劫記を以て名銭取す年既
老大何ぞ治術の大害をなす乎あらん
其詳なり我聞人曰く地方の説豈容易ならん
や余一二典故を擧げ言ん小梓我
皇國のつゞつ下春二月八日畿國の月す

神武天皇の二年春二月八日諸國の民を石さ
是五穀の種物綫何々々々々々耕作をなす年貢
出せしめ詔阿里拾七代

仁徳天皇の御宇難波高津の宮より民を先さ

波菜蔬を訂し五ふ三拾四代

推古天皇の二年春二月聖徳太子奏聞何々々

國々へ御使を給り農務稼方綫教させ五ふ四

拾八代

稱徳天皇の御宇大臣吉備公勅宣を奉り大小

の委綫種る事を天下ふおし其後五拾

二代

嵯峨天皇の御宇弘仁十一年藤原冬嗣公勅を

奉り播種の時より後れざり平をおし五ふむ

つとむ

神代の御時よりと年々新嘗と中事何り二

拾三代

清寧天皇の二年十一月大嘗會の御大禮を初
免ふお大嘗會の御祭事其年の新穀を諸神
不供しあふ乃神田錢定免十月又勅使を下し
毛見をなきしめらね是錢拔穂の使々唱く十

一月

天子親く新米を供進しあつり如斯の御例よ
あふがひ立毛乃善惡を見届け取箇錢定め
あふと我ら後戦争の代となり英雄四方又割

拙し貞賊の法厚為次第も何りく一言よ中
し難し近代地手の書數十百部あり皆寫本よ
て傳ふいのが短丈愚痴をいへおあかほりく
著述は向を得ん問く曰く我
皇國の清事承りしひぬ支那もくは地方の
事な様々むのりきりまよや序ながら承り
度々答て曰く急入る於問もくは支那もくは
をむつろきりまよ我

皇國名御徳廣大なるはすす異國の法もそ
をよま事を不用ひあふ故に地方の事大程お心
多敷事よ今其阿らす言んよ昔伏義
とつた神聖出あひく八卦を畫す單柝とて
單者陽爻とて
■ ち重柝者陰爻とて ■ 也
あれ一多れて二つと成り積んで八卦とす即
ち數の始免なり神農ふありく八卦を重初て
六十四卦とて其用を廣め遂に耒耜の器械

制し耕作の道をおし仲後世祀りて田祖と崇
免り又堯名日月星辰成歴象し舜名璇璣玉
衡を存よ七政成齊小皆農時を民小示
あふあふり於て農業の道益开け天子と自身
は藉田の禮を躬りせられ耜をとりて推あふ
あと一度三公九卿大夫より自ら耕の數あり
是より以後代々の天子耕作を勸むるの詔多
しこのや貢賦の法も夏殷周三代の掟あり井

田の法とく井の字地楷書まかく時々九ツの
區別くとなり一井九百畝あ少く八人あ多く八區
地作取箇あ五十七百畝徹法助法あなど夫
と替あ王阿り今清朝あ多くと藉田の禮を行ふ
又仲明えの世あなる文献通考農政全書あなど阿里
て農務あを治國の大布容易あなるぬ事態あなる志
せり問く曰く和漢租税あの起本あを承りゆひぬ
然れどと書物あむこの里あ多く俗あなる書物藝あ水

練えなぐく申く實地を踏あく新あく事あり尚あらざ
まば実用あの阿あらず先生美術の典あ古真義あを究あ
免あふふあるれど實理あ實踐あ乃功あ法あ試あして作あ
られぬ事ありもや答て曰く在ある所あありくは我
不あたなるのり地方の事あは新あく東國あ或る西國あ
在あく覃思あ潛心あを於あ予殆あ三十年地あ事乃統あ度あ
且あたもくく研精あがくを覚あく其物あなり今
長谷川あが徒刺あたる所あを尺あく積年あの惑あを解あん

也悦びの多えざりしは何れ圖らん一撃中已
 小箇福を記を記しと盡乃人を惑りし治術の弊
 故拓き 關夫子乃名を汚し同門の嘲を來せ
 んとは大方を望み失くし既今卷末量地乃
 部を尺たり古尺のく少方儀を出し又大方
 儀と唱ふるもの多二用を一器と化れるもの
 多く巧器の色何ふがれものを著しく巧たく
 其製造を圖解し又望遠鏡管内乃玉數を記書
 著せしる何事ぞやは量地家乃為し是れや
 ます器工人乃為ふせ向や且又此器を用ひ量
 取ふ乃法を尺たり遠近度狭乃形勢を盤ばんと乃
 紙面は墨線を引摸し密面体計りし里程体得
 向の法しと二百年むの町の町見家者流の
 なまふ今乃傳はりて多算の好事家乃既物と
 かりし今乃測量家のとらざりふなり志し
 ありし由しと論あり是等を以し初學の量地

の一端を喻さんや申向や但し此法を施すと
し後測量地家乃法則や申さんと申向や首
巻の凡例を凡々又測量地の法を測器乃精工や
測量乃維練とふ所らざれ密合せむ巻糸は
國郡村里等乃方位を測量真形の縮寫を摸寫
し乘除を用ひて量る法を載ふと又割圓
八線表を檢し法數を設用矩比例の法に
依り乘除を施すとさるる法をゆがとつた

國郡村里等乃測量地を捷徑法とて用ひ別
術を示んと云々能き者彼ハ此術をとりて
せりやおもしろき是實地を渡らず塵劫記乃
見を以てしる所のあり如竹兒童の歌中法今
乃學者何れも此法を實測に用ひんや標量地を
私に申す所なきものなり天下君命の重き法
得く後町見或る分間申るなり其術をわけ
綴密乃術を施すゆりてと八線の乘除は過

ず能く君命を蒙る程乃者是等々術を煩ワザヲし
とせん孟子モウジと夫仁政必自經界始經界不正
井地不均穀禄不平と流ハをシりカくル容易
ならばハならぬを熟練の學者測器を精工
あら密合の術を用ひて實測せざんば有益のつ
らん是治術乃大本ならぬをならり能はず也又此
法をとりて先初學法を講りんとならば大方儀
の如き手量器を用ひて也も世に有益也

くは器を用ひての法は用ひたるの具を是の爲に用ひて
手量器の如きとならば筆紙を費して書き
著せる者畢竟彼等が庸俗を欺むんとする意は
二覆をしりと尺中實を歎く履を次身なり我
必ず一書法綴つて其非をわかずして誤を出すに
ん世乃く先國家の忠以つて點を出すと
つと時に門生一乃書信を出すにあられを見ん
向き城山奥邸君が書きて觀齋内田先生と

其書籍とも覚くぬ事なると留保せず其趣意を
中途に一辨祖税の事を國の大本なれが明白な
しく其書秘を盡きしものより何れども巨細乃
法もど愚昧乃百姓より告諭を多る及く感を生じ活
術乃害ともなる處をありや

御入國以來地守の書籍數種ありとつて其皆字
本もしく板本の身一適勸農固本録採乃板本何れ
ども其通例の事を誌しつゝるをよしく巨細録を

さし付る是遠慮ありての事歟一し地方の美書
も容易上梓する事なると流祖 関夫子の戒
も何れもを咄たり終るよちと書は度

官許を蒙りて賣本ともなりたりとありて毎事詳
小訂西一其通言よりつゝるすく能く穿鑿する處を
は勿論なりたりとさるなく己の言をいへる地方の事
物もつとるすく櫻子園乃大布とる租税の紙を論
し間亦私見を加く杜撰の書故何れりて賣本

と云ふ一々る利を利んとく世人に感惑せしむ
阿ふれり存るに書天方より新りれんを移てるい
ちる害を生む事と志る感つるに因て今出
一に此阿ふて論を論し夫檢地檢見等あり
てる青表書の一々る活周をなさず何とせ
を檢地は縄心など云事あり百姓を安ん
ず乃仕方より地押等の處を以て竊奪の田地反
歩を以て武杖と様々々々縄心を志る出れ大事
之

檢見と極州乃出合を以て取箇を仕出す事なれ
や是又大事ありくは心持なき時多公民の間
大なる損益出来取箇お高せぬ事ななる
他々々地方の事を以ては役人ももろろ長谷
川門下乃著り一々の大成を以て檢地檢見川
津徳町見術分間術等此書に依りて何ひも手
支るなきなき杜撰の書浅崑岡の玉乃如く
重一實地は情々時仕方の通りなきんと思

ふ人乃阿のまじきまじきとなく川除善徳等の間
違ふ指圖をなすとも此等の役人を更なり小
おの者よりあるはず年々の事よりゆゑなれを承
引せず恥辱致蒙るまじの事あり善徳を村より
任せ出束とせし事なり檢地檢見等乃仕方より
まじき百姓の委しくある事なりはず役人の心
は有難き事なり百姓永代の家督よりわらハ
れ檢地一村に年の取箇を定る檢見何事と容易

ならざる筋を杜撰の書より檢く一知半解より事
成る扱はんを責む阿ぬたき事なりや又農家乃
若彼書を書林より買求免檢地をこの方より檢見を
かやうに外何ともやうくの紙なりとく己のさ
のしき少おしとともまじく杜撰乃青表紙を尺咫
しと是れ信をゆりゆりなり事乃連出束とる
基より恐る事なりこのつふ少なきは見え
法存し通り數學を未熟より地方の事なりと溜

井乃を 通類^ひありき 量徳を少しむるより多御^ひ事也
河原の地ぞ川除^ひ量徳等の事を甚く案内を若年
之頃より地押等より人々附^ひ流く三四夜を掛し
事とされ何り今間^ひ繪圖などと度々仕立^ひ檢見を
数夜多掛^ひ長留少しき端と無く長^ひの地ど中々
地方の古法を字解^ひし今事をもの地^ひの標^ひり
とるあれなく今間^ひ街をたゞ免^ひの程^ひ地方功也
の^ひに附^ひく通^ひ信乃量^ひ地^ひ街を替^ひ合^ひりて^ひ其^ひ場^ひに

臨^ひく 測量の上今間^ひ繪圖を仕立^ひるは 大なる^ひ粗^ひ語^ひ
出来しと^ひ苗^ひり乃^ひ番^ひ附^ひより初^ひ書^ひ一^ひ其^ひ付^ひり^ひざる^ひは
其^ひ異^ひ差^ひを^ひ西^ひきんと^ひ欲^ひ止^ひるも^ひ外^ひに^ひ仕^ひ事^ひなく^ひ毎
夜^ひ困^ひり中^ひに^ひ其^ひ後^ひ何^ひ能^ひ効^ひ解^ひ由^ひ乃^ひ門^ひに^ひ入^ひり^ひ固^ひ郡^ひ村
里^ひ乃^ひ量^ひ地^ひり^ひ割^ひ圓^ひ八^ひ線^ひ表^ひを^ひ用^ひる^ひ精^ひ測^ひを^ひ知^ひり^ひ場^ひ所
は^ひお^ひい^ひく^ひ其^ひ街^ひを^ひ減^ひと^ひり^ひ繪^ひ圖^ひと^ひ布^ひ算^ひとの^ひ二^ひ法^ひ
其^ひ用^ひひ^ひ事^ひ亦^ひ多^ひく^ひの^ひま^ひに^ひ利^ひ方^ひを^ひあ^ひし^ひく^ひ近^ひを^ひあ^ひす
似^ひく^ひ互^ひに^ひ捷^ひ徑^ひなる^ひは^ひ其^ひ法^ひを^ひ知^ひり^ひて^ひ其^ひ法^ひ

を司ひし中と固く同好の人乃為りよとなれり
存貯新の思考の捷表を作り右表を用ひて歩法
の一一と事なすお考先達と量地弧度算法の書
を著りし場ありて便利のつた折本は仕立同好
乃人の需向何らお贈らんや花板より一置
紙廣くせよ公のせよや達く是兒乃はく先玉
新の志のつひ書舗に鬻ぐも白事となりこれ
少と事功ある人乃眼より尺をたたくなら

が考のつたぬ事と多うな成りや羞りき事
より存居る町見と分間と回し事なごら町見街ハ
地方より用ひるのつたらず炮術家軍家なごも
皆んは長事より唯向しは尺ゆれ目尚の遠近
高低度狭浅深を量るまごの事なれど一村廻り
檢地分間繪圖等をはさる事よりありて中々
のよき論を如きは出来しは是る實地
に困るる人より何らさればおきぬ事より彼門

下の著りす所乃量地の部を凡れ少ちと方儀と名
付らる羅針盤らとんぱんを外國乃製ハ志こころづ我邦わがくににお
て者伊能乃工くわう夫おのく測器工孫まご之即すなはち舎やうトモト
先まく製つくる器なり此器便利なりと似にれど
之こゝは阿媽あまなる器あり伊能も測量の器なり
も此測器を或ある挺たいツと立たせ或ある挺たいもと測そく量りょうり
る事なりまま山坂乃上下測量の事別べつな象さう
限儀えんぎを用ひるるき測器を手重ておものるぬがらしして

伊能を常とこく中ちゆうの事こともも實地じつちのちん練れんくる人
乃えん勤しん考こう志しととある阿媽あま又地方ちゆうほうありあるるより百
二十にじゅう分ぶんの刻まがくる羅針乃見盤けんぱんを用ひ寅何分いんなんぶん外
何分なんぶんなどなど唱なるる阿媽あま伊能も量地の器三百六十
度乃羅針盤を用ひながら古法こぽうのた儀ぎひ子何十何
分ぶん丑何十何分と唱なくると通とほりの時とき儀ぎのち儀ぎもも考こうく
事ことなれば少ちと子著述乃孤度算法こたうそふざんのち度たととのち名
目めい法ぽう用ようひず分ぶんと唱なくる中ちゆう又方位と初位より算

を^{ガニ}發すとい位より算を考すの法阿れど少子
を西乃方位引ひ子の西より算を考し西の西ま
ぐ二十分の間越子の方位や支^{しご}毎よられ越
て亥の西より子の西まぐ三十分乃向を亥の方
位と定ぬ事と

台^{たいめい}命を蒙り伊能が測量しる國と海^{かい}灣の地圖
あり方位割^{わり}られも同しはあれは布づく事尚
然^{ぜん}の理をとなふ志の一量地を幾を何れの法を

用ひるとと^{あま}真形乃^{しやづ}縮圖さく出来たりとら
る事^あ敢て法乃^{せい}精粗捷徑^{せいそせいけい}迂遠を論ぶ^{えん}事さる阿
らば租税の事よりくまありとや如く國^{こく}家乃
大事より法を治術の害たりは杜撰の書を^{るや}考
關^{かり}る看過了る國と乃不忠をとなふ史^し兄と長
谷川氏とは目下門ら乃兄弟なるは有^あ松と書天
下^ての流^{りゅう}布^ふし關^{かん}夫子の遺^い愛^{けい}の^う骨^{こつ}を千載の後と
故^こ目下先生乃^{けい}英名を^{けい}呼^よぶものなりと^{けい}ず^{けい}一^い國^{こく}家

の害となるを疑き紙を縫く傍観しあふる道より
阿らざらざるを罵く彼を論し糊口の利なき事
紙や先く國忠の紙を失りざらざるをぬくのと
存る是よりなりと彼書中へ後へ後得とありと
たよ志ありとく呈す

一稱呼乃り遠きいりなり巻の三巻徳之部尺八植
乃和木の葉よ葉入と書くおびつりと仮名付阿
里是を叶冠よ葉とくふ字を書くホツと讀く葉

入といふ事なり紙原本より叶冠を落しつるを葉
とくはく誤りしとめとんてりそ外巻の四掛
液井の葉よ土金板をどくなむん又回書中植
の葉よ土金板の土の字原本より落しつるを金板
と書くりなむんと仮名付阿り尚又回書中牛椀
の葉よ大聖牛をだいなむらうと讀く又回書
ふ洞木牛と書てはらざらうとくみたり是を洞
木牛乃洞の字乃偏を傳寫誤りく洞といふ字よ

なりし我洞とんねらなる成し其外檢見の条
小立毛^{かうけ}成た出げ内見^{ないみ}をなぬらんともみ又檢地
の条は死馬捨場^{しばさてむ}を志にむますてむ本陰引^{ほんかげ}をこ
うげびきなどく通言を志むば仮名身せし類卷
申数^{あまひ}多阿りちるしとれどつとあき成^{とが}答むらよ
つと向なり是地条の事を耳^に夢^{ぐく}とせぬらんが
なり

一卷の四書後々部^{しゅう}義出の条^{ぎしゅ}なる出の句配^{くわい}を出

長拾間位を割余長出の条を割余も川上く向
け^た成^{らん}く阿りて事を彼の書乃種^た本^{らん}とら存^{らん}の隄
防圖舎もも忍くを何の書よあれ阿り事や是ま
で罷出^ひし抗^か出^いしとも川上く向け出す仕方を彼
のず能く水勢強^{つよ}きあまく地形大石とあき阿り
りねを真^ま直^{すく}なる出り事とあれ阿りあまい流し
あし水^{みづ}削^とりし事のと功^{こう}未^みの人^{ひと}乃^{なり}話^わを
取^とり長^{なが}のひき

一回書中沈梓の条は梓柱長六尺内法言五尺とあり
里それみく名貫木をある方より通してある梓乃
是よりづりむこのりみく保ち難く定法ハ内法言四
尺三寸なりあり一是る著述者の誤るを何とぞ
隄防圖舎にも其通り積り方ありあるありあり
ハ右程より然りし部沈梓を巻籠りて包む外あり
尺申すそのより何とぞ其回数ハ圖中幾下は沈梓
を彫りし水面よりよと出り一島よりある隄防

圖舎乃其條解せしむる書誤りなるなり

一卷のと租税の部檢見の条は大檢見小檢見と云
事あり是る古風より遠國私領ハあるべ當時御
料ありしハ多しと改り夫れと云われ大檢見
小檢見ありは條列ししの際を列し是を改むる
ところ仕方ある此書の種本と見しし地方大成
録の作者乃了簡より出たるものより能き仕方と
いふも何とぞ其條を條列を必ずあるなりと云

新事定法と云々書くは桑の毒なり事

一前同断檢見の桑少桑根の桑 丁三十九 又別合五

拾三町三反三畝拾歩合四百八拾石刈出合

但予減引此細三百式拾石式口合細八百石と何

里能り安右合反別の合と書くは所を足れむ式

町を反式畝拾六歩仕付荒皆損とありさきんれバ

右合反別の内よりお乃付荒反別を引残り毛附

反別一刈出合を懸く刈出細仕出は事定法な

尚も付荒反別一より刈出合を懸るやのあふと

らね難んれは是又地方大桑根と照し合々く是

裁尺より合五拾三町三反三畝拾歩刈出式合但

予減引く反別五拾歩町式反廿四歩皆損反別除

く細三百式拾石式口合細八百石と何り合反別

之内皆損反別式町式反式畝拾六歩を引帯ハ右

より五拾歩町式反廿四歩と何るあれ毛附反

別ありあきく刈出合を懸るは地方大桑根と

得く合及別一州出合を数く右州出初三百或
拾石と有り夫く内見付出初四百八拾石或加
し合初八百石と有りく有り彼門下の所特屯
於地身大衆録もとて通有り書く河々流き或五
拾石町或及廿四歩く其初三百或拾石もは
なぬ右流と心けく毛附及別をハ書載ざるな
向流一故よ是もくも金く付流及別く右州出合
乃廻りくくもなま有り是檢見の紙を志くざん

中有り存く杜撰なる書或多中有りく檢見をな
し仕付流皆無及別く右州出合を数く取箇或仕
出くたゞん有り百姓乃大難後と有りく騷動出
来も或一夫虚を吹く馬大言を傳あの程也或
或も事たりやあざむき有りたりざんやせよと
つゝ聖人の語を論語讀ぬ人ありと耳も入く或
内事たりと天下の爲一著述もなき人の意と
之存られず世人乃弄く野史もく廉陋の事

何れも^{あま}なりをまぬのまがす^{あま}りて^{あま}りらんや國
務^むの要^またる租税の書よおまぬを

右^{みぎ}の外も^{そと}も^もは^は何れ^{なに}も^も金^{かね}多^{おほ}れど^もて^も指^さす^さ向^{むか}ふ

暇^{ひま}何^{なに}れ^れ又^{また}回^{まわ}り^り門^{かど}下^{した}の著^{あつ}け^けす^す交^{まじ}り^りの地^ち方^{かた}指^さす^す向^{むか}ふ

書^{しよ}を^をと^と一^{いつ}決^{けつ}め^めり^りて^ても^も似^にか^かる^る書^{しよ}を^を指^さす^す

向^{むか}ふ^{むか}り^り標^{ひょう}題^{だい}以^もて^て事^{こと}を^をお^おま^ます^す

と^となる^{なる}少^{すく}子^こお^おま^ます^す遅^ち駕^か未^ま熟^{じゆく}と^とて^て識^し見^{けん}も^も多^{おほ}き^き事^{こと}

先^ま兄^{にい}兼^{かね}多^{おほ}法^{はふ}取^とり^りお^おま^ます^す世^よ乃^の害^{がい}也^{なり}と^とお^おま^ます^す

國家の事よき^{こくがのことよき}り^りと^と事^{こと}と^となる^{なる}る^るは^は修^{しゆ}め^めり^り正^{ただ}し^し

う^うろ^ろく^く不^ふ敏^{びん}を^を悟^{さと}り^りず^ず愚^ぐ意^いと^と疑^ぎ先^{せん}兄^{にい}に^に法^{はふ}法^{はふ}中^{ちゆう}に^に

先^{せん}兄^{にい}精^{せい}敏^{びん}明^{めい}断^{だん}と^とい^いは^はす^すは^は國^{くに}を^を治^ちり^り少^{すく}子^この^の此^{こゝ}論^{ろん}

争^{まじ}ひ^ひを^を救^{きう}ふ^ふ數^{すう}學^{がく}者^{しや}と^と名^な理^り孤^こ背^{はい}等^{とう}と^と術^{じゆつ}を^を競^{きやう}ひ^ひ闘^{とう}

無^なり^りと^とい^いは^はす^すは^は論^{ろん}に^に法^{はふ}法^{はふ}と^とい^いは^はす^すは^は後^ごに^に於^おけ^けり^り

能^よく^くと^とい^いは^はす^すは^は熟^{じゆく}と^とい^いは^はす^すは^は長^{ちやう}谷^{こく}川^{がわ}氏^しら^らも^も法^{はふ}法^{はふ}中^{ちゆう}に^に

亦^{また}下^{した}に^に於^おけ^けり^りは^は仁^{にん}利^りを^を争^{まじ}り^り國^{くに}忠^{ちゆう}誠^{じやう}を^をと^とい^いは^はす^す

され^{され}る^るは^は以^もて^て及^{およ}ぶ^ぶと^と樂^{らく}を^を吐^とき^き仕^しは^は文^{ぶん}中^{ちゆう}に^に不^ふ敏^{びん}

し文字とて有しゆゆ其むらや存意お徳のまぐ
みへ改竄を加くしやるま旨も毎法字也可らりゆ
恐惶頓首

八月十一日

奥平喜三郎

内田彌太郎様
松下

余牌を折り喜しく曰く城山君は己の其膏肓を礎
し世の惑我解せり親密先生明敏質實溢る
きんく毫とほさず數術の精妙其天禀より出り

實用を本とし百家乃萃枝抜き遠西瑪得瑪弟
加の義法を研鑽し々々算學乃箇奥より入る又近
日某侯の命に應じて租税を根窮す吾黨の高
是皆為る之舎我避く此道の巨擘と云ふ亦可
ならんを若城山君が書りし々々於物ふ若阿ら
る必ず長谷川氏が痼疾の病因を究り頭上乃
一針を下さん事必せり二君此道の為より力
用ゆる事なれり是れなり是れなり城山君

其 校勝を著し、親齋先生亦其是哉、
長谷川氏に逃避し、吾亦何を
の言んや、長谷川寛が如き多塵劫記を演述し
考ら、世説を守り、世利し、世に亦大なり、世説
の奥旨及び地方の説より、有識を譲り
く可なり、門生唯くして去る、遂に問答の言、
志し、同門の領事志の刊

關氏宗統六傳

強國作噩仲秋日 城南隱者 栗田宜貞誌



余結髪より象緯の學を好み、旁ら農政の事、
嗜たり、今茲盛夏の頃、水郷に遊歴し、
地乃書舖あり、地方大成と題せ、
根拠古人乃造、
其も少なる、
其誤りを傳へん、

